

『はまゆう』へ来はじめて三日間は雨ばかりだったが、案内客が多いのに里子は驚いた。

近くの工場まで荷物を運んできたが、雨に降られて荷の外が少し濡れて文句言われた、とぼやく若い営業マンや、郵便配達員などが雨宿りに来て、ハルの香豊かなコーヒーにホッと一息ついていた。午前十時を過ぎるとハルと松代は、昼の定食作りで忙しくなるので、喫茶は里子一人で切り盛りしなければならぬ。定食は二十食と決めているが、断り切れない客のために余分も何食か作っている。定食のほとんどが、病院の女性事務員や近くの工務店からの予約で、すぐに完売になる。

(松代さんがいなくなれば魚の煮つけやみそ汁く

男の視線が、白いエプロンをかけた里子の動きを追ってくる。ぶしつけだが、不思議に嫌な感じはしない。

(どこかで会ったことが……)

先客が立ったので、里子は入口奥にあるレジに行つて考えていたが、思い出せない。客とやりとりしていたら、危うく釣銭を間違えるところだった。レジを離れて、男に定食を運んで行つても里子の気持ちはまだもやもやしていた。

「あのう、もし間違っていたら、すみません」

口ごもりながら、彼のほうから話しかけてきた。

「……………」

「何週間前だったか……。あなた、徳島からの最終

らしいは、手伝えるようになりたい」

そんなことを考えながら、里子が盛りつけを手伝っているときだった。店のほうでカランカランというドアリンの音がしたので、行つて見ると、白髪混じりの男が立っていた。

「いらっしやいませ。お席はカウンターでもよろしいでしょうか？」

テーブル席は病院の事務員たちの予約席の木札が置いてある。

「ああ、いいです。何か定食のような物はありますか？」

「お魚定食だったらできますが」

「じゃ、それ、お願いします」

列車に乗っていませんでした？」

里子の頭にひらめきが走った。

「えーっ、もしかして……」

「そうです。あのとときの酔っ払い船乗りです」

男の顔に笑みが浮かんだ。

「そうそう、名刺頂いたけど……。お名前、忘れてしまつて……」

「宮川と言います」

「ああ、そうだ。そんなお名前でしたね」

思いがけない再会に、里子は半ば呆けているような気分だった。

「こっちの方面にちよつと用事がありましたね。」

車走らせていたら、列車の中で聞いたような気の

するお店の名前が目についたけど、どうやら喫茶店のようだし……。まさかと思いつながら入ったら、あなたがいて……」

宮川の話に、里子はどう応じたらいいのか、すぐには思い浮かばない。

「あの夜、わたしは寝過ごしして、徳島から屋島へ引き返していました。てっきりお店からの帰りだと思つたあなたに、店の場所を聞いたら、今から行く高松の地名を言ったので、かつがれたのかと……」

「……どうも、すみませんでした……」
里子は、わたしの方だつてヒヤヒヤドキドキしたのよ、と喉元まででかけたが、飲み込んだ。

宮川がカウンター席で食事を済ませコーヒーを飲み終えた頃、予約客の一団が入ってきた。急に立て込んできたので、居辛そうな宮川の気配に里子は慌ててカウンター席に近づいて行つた。
「このお店、夜は居酒屋もやっているのよ。昼間は、このようなお食事喫茶をして、休む暇のないお店だから睡眠不足ねって、皆さんに冷やかされていきます」

里子は、肩をそびやかしてほほ笑んだ。

「へえ、そうなんですか。なかなかおもしろいお店ですね。またゆっくり来ますよ。料理美味しかったし、コーヒーもよかった」

「今日は急かせるような感じになつてすみません

宮川が何か言いかけたとき、

「そろそろ予約のお客さん来るから、配膳の用意お願いね」

ハルが奥から、チラッと顔を覗かせた。

「はーい。では、ちよつと失礼致します。ごゆっくり、どうぞ」

里子は奥から、松代が並べた料理を配膳盆に載せてきて、窓際の椅子席へ次々と並べていった。

白地に紺色の有田焼の食器は深い海の色を思わせ『はまゆう』にはぴったりだった。さつきテーブルの上を生けた一輪ぎしの水仙や山茶花も目立つでもなく、かといって自分を強く主張するでもなく、ちよつどいい具合に食器と調和していた。

でした。これに懲りずに、またぜひお寄り下さい。
喫茶の方は午前九時からやっています」

里子はそう言いながら、笑顔を添えることも忘れなかった。

「夜は紺の着物なんか着ているのですか。でも、白いレースのエプロンもよく似合っていますね」

レジに回つた里子に、宮川は言った。

（あのときの紺の着物は自分だけの頭でして理想だったのに……）

夜行列車での不思議な一夜に里子は驚かされる。

「あつ、すみません。居酒屋の方は女将さんだけでやっていますので、わたしはいませんが、どうしてわたしが紺の着物きているって思われたので

すか？」

「わたしの知り合いで、民謡の先生がいます。

その人がいつも緋の着物をきていますが、とても似合っているので、ついあなたにも着せてしまいました。すみません」

「宮川が咄嗟に思いついた嘘だということが、

里子にもわかった。

「いいえ」

（奥さん、民謡の先生しているのかしらん？）

「大の場に『はまゆう』が本当にあるなんて、思ってもいませんでした……」

こう言つて、宮川は口元を緩めた。

里子も罰が悪そうに肩をすくめ、

田原に、宮川は自分の身の上を少しづつ明かしている様子だった。

田原の話では、宮川は奥さんと別居し、現在独り暮らしをしているとか。別居に至った理由については、まだ詳しく聞かされていないそうだが、奥さんの方に何か問題があるらしい……。

（宮川さん、確か、外国航路の船員だった、つて言つてたけど、航海中に奥さんに好きな人でもできたのかしらん。それとも病気に……）

里子はどこことなく孤独が漂う宮川の後姿を思い浮かべていた。

彼が店に来る回数を追うごとに、里子との間に流れていたぎこちなさは無くなって他の常連客と同

「あのときは、この店にはまだ勤めていなかったのですが、気がつくとも叔母の店がある町やら店名を口にしていました。ごめんなさい」

里子はどうとう本当のことを白状した。

「そうだったんですか」

それから宮川は暇さえあれば『はまゆう』に姿を見せるようになり、いつの間にか常連客の田原とも親しくなっていた。二人はコーヒー道つていうのがあつたら、ハルさんに家元になつてもらつて、ときどき茶会のようなものがやれたらいいのになどと、たわいもない話に花を咲かせていた。

地方公務員を退職して悠々自適の生活をしている

じような親しきで話ができるようになっていた。そんなある朝、

「最近、里ちゃんが買ってくる花、ちよつと変わつて来たような気がするけど、気のせいかな？」と、ハルに言われたとき、里子の心は波打ち、顔が赤らむのが自分でもわかった。

「早春だから、花屋さんの花も豊富になつて、ついで明るい色に目がいくんよ……」

里子は慌てて言い返した。

「赤いチューリップの花言葉、一日今日も快調、オレンジ色のアネモネは、はかない希望、恋だつたかな、まあ明るい色の花は人を元気にするからわたしはいいと思うわ」

あと一週間でいなくなる松代は、店の本棚から花言葉事典を取り出して読んでいた。

「いつけん元気そうにしている彼女だが、最近、今さら慣れない都会へ行って大丈夫なのか、迷いはじめている。」

「無理だったらいつでも帰ってくればいい。松代さん一人が食べていくくらいどうにでもなるけん」

髪をいつもアップに結びあげたふつから美人のハルは、物言いまで鷹揚な感じだ。

昼の定食が終わり、三人で雑談をしながらカウンターの途中でスプーンを磨いたり、コーヒーカップを並べたりしていたときだった。

宮川は里子の顔を見ながら、首を傾げて見せる。

「はいはい、わたしはまだまだコツが掴めてないです」

里子は小娘のように宮川を睨みつけた。

「そんな大それたコツなんかないわよ。飲む人を思いやるハートがあれば、誰でも淹れられるから」

ドリップの中へお湯を注ぐハルの周囲からいい香が漂ってくる。

居酒屋の女将の彼女がどうしてコーヒーの淹れ方にこだわっているのか、里子がかねがね不可解に思っていたが、

「うちの一滴もお酒飲めなかったけん、それなら嗜好品でも贅沢させてあげようって考え、凝

宮川がやって来た。彼の座る席はカウンターの右から五番目に決まっている。ちよつと振り返れば海が見える。

「昨日まで風があつたけど、今日はだいぶ風いできたな」

彼は非番の日でも天候を気にしていた。

「はい、キリマンジャロコーヒー」

この頃、里子もときどきハルに替ってコーヒーを淹れてみるが、通の客にはまだ自信がない。

「宮川さんのコーヒーそろそろわたしが淹れてもいいかしらん？」

「ハルさんのコーヒー美味しくて好きだけど、どうしようかな？」

りはじめたのがきつかけよ。それを今では商売のひとつにしているんだから……」

ハルの夫への思いやりに、皆感心した。

「お客さんが、このコーヒーカップは、高そうな物ばかりだから、あんたも扱いに気を遣うでしようって、言われたけど、そうなんですか？」

洋食器にあまり詳しくない里子にも、そのどれもがいい品であるのはわかる。

(以上7月8日放送分)